笛　川　中　学　校

一人ひとりの学習意欲の向上と，主体的に学習に取り組む生徒の育成

Ⅰ　主題設定の理由

1 本校の学校経営方針から
2 学習指導要領から
3 生徒の生活実態から

平成19年度全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙より次の内容が明らかになった。
本校は「朝食を毎日食べる」生徒数が全国平均よりかなり高く，

食べている　　笛川中　９１．９％　　全国　８０．５％

その他の項目もおおむね良好であり，生活習慣が安定している家庭が多い。
一方
「家で学校の授業の復習をしていますか」
あまりしていない 笛川中　４６．８％　　全国　３５．４％
全くしていない　笛川中　２４．２％　　全国　２５．２％
このことから，生徒は学校の授業を頼りにしていることがわかる。そのため，よりよい授業の工夫が求められている。

以上のように，本校の学校教育目標，学習指導要領の目標及び本校の生徒の生活実態を考慮した上で，生徒により高い教育目標を達成させるためには本主題がふさわしいと考える。

Ⅱ　研究の内容と方法

1　全体と部会での研究

全体研究会
教科指導研究会　（国・数・英研究部会）（職員全員がそれぞれどれかに所属）
学年指導研究会　（職員全員がそれぞれ１学年，２学年，３学年のどれかに所属）

（１）教科指導研究会

ア教科指導研究会（国・数・英研究部会）に所属し，研究の深化をはかる。
イ基礎・基本の確実な定着を目指し，指導方法の内容を確認し，そのための指導計画を明らかにする。
ウ全国学力調査の結果分析
全国学力調査（国・数），山梨県教育課程実施調査（英）等の結果を分析し，授業改善や，朝学習などで補充学習を行う。

（２）学年指導研究会

ア学年ごとに学習規律と学習習慣を確立できるようにする。
イ生徒の生活実態を把握する。（生活アンケートを通して）

３年生が実施した生活アンケートを１，２年生も実施する。また３年生が実施した生活アンケートも本校で集計し，昨年度のアンケート結果と今年度の各学年アンケート結果を比較する。その結果，生活習慣の改善を含め生徒につけさせたい力をそれぞれの学年指導研究会で目標を設定し，取り組む。また昨年度すでに生活アンケートと学力の相関関係が分析されているため，保護者へアンケート結果を提示し，家庭学習，生活習慣，意欲づけの面で啓発を行うなど個別指導にも役立てる。

Ⅲ　成果と課題

１　成果

（１）生徒の実態をふまえた研究テーマを設定できた。

（２）教科部会では前年度の課題の把握と今年度の学力調査結果の分析を通して，生徒が苦手としている領域が明確となり，その課題に向けた取り組みを講じることができた。その成果が研究授業で明確に現れた

（３）学年部会では，生活実態調査を利用したが，単に三年生だけに関するデータ分析から行う取り組みではなく，この調査を１・２年生も行なった上で研究を進めることで，全職員がより身近に研究に取り組むことができた。このように全校同一歩調で取り組んだことで本校の地理的状況や地域性を考慮した本校生徒の特徴を客観的に見つめ直すことができたこともより良い生徒理解につながった。また調査結果を，生徒や保護者に示すとともに，山梨県教育委員会から全県の家庭に提案された「生徒の５アクション」に加え，本校で作成した「保護者の５アクション」を提示し，各家庭へ生活改善の勧めをするとともに，各家庭からも意見を求めるといった双方向の取り組みを心がけた。家庭からの意見をさらに学校たよりでフィードバックするなど家庭との連携を重視した取り組みを行ったのは家庭との連携が不可欠であるとの考えからであった。このように保護者も巻き込んだ生徒たちの生活改善の取り組みができたのも今年度の成果と考えている。

２　課題

（１）各部会の活動内容を交換し合い，共通する課題を明確にして取り組んだり，他教科との連携を図ろうなどの意見がある。今年度，それぞれの部会の研究内容を発表しあう機会を設定したが，この点は深まりに欠けた。

（２）学年研究部会では，各学年の実態に沿って，実践を行っているが，生徒の実態に開きが見られる。学年間の実践や研究の成果を共有することが難しいという意見があるため，管理職を含め，全校一丸となって，教師による，あるいは学年間の働きかけ（相互作用）をより効果的に活用しようと考えている。進級の節目や，生徒会の新旧引き継ぎ，生徒会行事への取り組みを通して，集団の力の向上をめざしている。

（研究主任　古屋浩紀）